

# 12年度 研究推進委員会のまとめ

研究推進委員会 宮本 乙女 宗我部義則 坂下 英喜 福田 正恒  
佐々木善子 木村 真冬 上沼 治美

## 目 次

I	はじめに	164
	1. 委員会の目的	164
	2. 活動の目標……研究の共有	164
	3. 活動の成果と課題	164
II	2001年度教育課程の提案	165
	1. 教科の単位数と時程	165
	2. 2001年度総合学習の提案	168
	3. 2001年度の OWN プランの計画	172
III	おわりに	173

## 要 旨

本稿は、2000年度の研究推進委員会の活動内容を振り返り、特に、記録として残しておくべき提案内容についてまとめたものである。活動の成果と課題について簡単に述べ、特に、2001年度の教育課程についての提案を中心とした。

これまで開発研究で積み上げてきた研究内容を共有しようという目的に添って、実践研究に取り組んできたが、特に、公開研究協議会の柱として掲げた「履修方法…OWN プラン」と「ネットワーク環境活用」に関しては、多くの教員が関わり、研究が前進した。また、2002年度を見通して2001年度の新しいS45分コマを基本とした時程の提案ができた。総合学習について、本校独自のプランをつくり、カリキュラム全体の中で構造化することは、完成していない部分もあるが、2001年度に実践すべき具体的な総合のカリキュラムの大枠を提案することはできた。

## I はじめに

### 1. 委員会の目的

12年度の研究推進委員会は、それまで3カ年計画で小中学校連携で進めてきた「開発」の継続研究と新教育課程の研究を行う、という目的で発足した。また、公開研究会の開催を企画運営するという使命も持って、活動を開始した。

### 2. 活動の目標……研究の共有

11年度までの3年間は、教育課程全体に渡る小中連携に視点があり、総合学習、自主研究、教科、履修方法など、柱のいくつもある研究として進んできた。12年度は、その3年間の成果をもとに、中学内でお互いの研究を共有したい、ということ大きな目標に掲げた。

また、「学校の情報化推進のためのネットワーク活用方法研究開発事業」の研究指定3年次として、公開研究会を行うことと、13年度の教育課程の提案をする、ということにも取り組んだ。

さらに、帰国研究についても、小学校・大学その他の機関と連携しながら、3カ年計画の第一年次としてカリキュラム作りと日本語教育の検討などに取り組んだ。

### 3. 活動の成果と課題

- ① 開発を区切りとして、OWNプランの評価と、課題・支援の研究が前進した。
- ② グループを「ネットワーク」「OWN」「帰国」の3つに絞ったことと、研究会でグループからの発表などを行った。これまでと比べて「ネットワーク」「OWN」の研究を共有することができた。
- ③ 帰国研究は3カ年カリキュラムづくりの1年目の成果がまとまってきた。
- ④ 小中連携カリキュラムの評価を小学校主導で行えた。
- ⑤ 開発4年間の成果を生かした2001年度教育課程の提案ができた。(各教科と総合、自主の時間配分、モジュールから発想する時程、OWNプランの継続、総合の集中実施等)
- ⑥ 自主研究については、開発で確立してきた3年間のカリキュラムを生かして継続した。1年生の研究の進め方として、ポートフォリオを取り入れるという新しい試みも始めた。
- ⑦ 教科の内容についての研究と、総合学習のカリキュラムづくりには、十分に時間をかけられず、今後の課題としたい。

このうち、①②の成果については、本紀要別章に報告を掲載した。

⑤の2001年度の時程と、OWNプラン、総合学習についての提案の概略を次章に述べる。

## II 2001年度教育課程の提案

### 1. 教科の単位数と時程

これまで、40分1コマで3年間研究してきた成果を生かし、かつ、2002年度完全週5日制実施を視野に入れ、45分1コマで行うことを提案し合意を得た。

#### 理由①

40分1コマ時程の4年間は、必要に応じてL80分を採用して、学習の効率を上げることができた。特に、生徒の自発的な活動を生かす授業に有効であった。朝の20分総合カリキュラムは、大きいコマとは違った活動を可能にし、午後の活動の導入や、行事に向けての係活動などに有効に使われたという学年の報告があった。(2000年度のプランは表1参照)このような成果を上げた、20分、40分、80分(朝の20分総カリ、20分教科、S40分とL80分の授業)という学習時間をとるモジュールの発想を、45分1コマ時間割ならば、生かせそうである。50分1コマ時間割を採用すると、各教科に割り当たるコマ数が減り、SとLを利用しにくい。

#### 理由②

もしも、40分1コマ時間割で、この4年間のように時程を組めば、完全週5日制に移行した場合、7時間目まである日が週2回できることになる。

45分1コマ時間割は、朝の短い総合カリキュラムをうまく使うと、週5日制になっても7時間目を設定しないで時間割を作れるプランである。

表1

			月	火	水	木	金		
			8:15					予鈴	
			8:20~8:30					朝礼	
			総	総	教	教	総	朝の20分	
			移動10分						
1	S	L	9:00~9:40	教	教	教	教	10分休憩	
2	S		9:50~10:30	教	教	教	教		
			一斉休憩20分						
3	S	L	10:50~11:30	教	教	教	教	10分休憩	
4	S		11:40~12:20	教	教	教	教		
			12:20~13:10 昼休み50分						
5	S	L	13:10~13:50	教	総	教	教	10分休憩	
6	S		14:00~14:40	教	総	教	教		
			14:40~15:10 清掃・終礼15分ずつ						

		土
8:15		予鈴
8:20~8:30		朝礼
		移動
1	8:40~9:20	教
2	9:30~10:10	教
3	10:30~11:10	教
4	11:20~12:00	教
12:00~12:15		終礼

教：教科の時間  
 総：総合カリキュラム  
 (自主研究、道徳、学活、総合学習)

3年間プラス1年の開発研究期間には、すでに、2002年度から行われる新学習指導要領の時間数通りに、教科内容を厳選して実施してきた。従って、2001年度には、現行の指導要領の時

間数に戻すことはせず、2002年度への移行をスムーズにしながらか研究を進めるために、45分1コマであっても、できる限り2002年度に予想される時間割を描きながら移行案を作成した。具体的には、次のようにすすめた。

- (1) 新学習指導要領で示された50分単位の各教科の年間時数(表2)から、総時間が同じ値になるように、45分単位の計算し直し、各教科に配当する週コマ数を算出した(表3)。

表2 新学習指導要領に示す年間コマ数(50分1コマ)

必修	国	140	105	105
	社	105	105	85
	数	105	105	105
	理	105	105	80
	音	45	35	35
	美	45	35	35
	保体	90	90	90
	技家	70	70	35
	英	105	105	105
総合	道	35	35	35
	特	35	35	35
	総合	70~100	70~105	70~130
選択	選択	0~30	50~85	105~165
	合計	980	980	980

表3 45分1コマによる週あたりコマ数

国	4.7	3.6	3.6	11.9
社	3.5	3.6	3.0	10.1
数	3.5	3.6	3.6	10.7
理	3.5	3.6	2.8	9.9
音	1.5	1.2	1.2	3.9
美	1.5	1.2	1.2	3.9
保体	3.0	3.1	3.1	9.2
技家	2.4	2.4	1.2	6.0
英	3.5	3.6	3.6	10.7
道	1.1	1.1	1.1	3.3
特	1.1	1.1	1.1	3.3
総合	2.2~3.2	2.2~3.3	2.2~4.2	6.6~10.7
選択	0~0.9	1.6~2.7	3.3~5.2	4.9~8.8
集中総	1週/年	1週/年	1週/年	
OWN	2週/年	3週/年	4週/年	
合計	31.0	31.0	31.0	

\*表3の数値は表2の数値を50/45倍したのち、各学年の必修教科の授業週数(各学年集中総合に1週間とOWN期間の約半分の時間が選択教科になるとみて、1年=35-1-1=33週、2年35-1-1.5=32.5週、3年35-1-2=32週で割ったものである。道、特、総合は35週行う)

- (2) 次に、半端な数字を調整した。そして、本校では、総合カリキュラム(総合学習や特活、道徳)は、1年生の段階から上級生並みに時数を確保している主旨を生かし、新指導要領に示された傾斜配当(上級学年になるに従って総合、選択が大きくふえていく)を採用しない、という方針で、教科の学年配当を調整した(表4)。これが、2002年度のプランの元になる予定である。

- (3) 最後に、昨年までのプランの関係で、新3年生の時間数が内容的に不足すると予想される技術家庭科、保健体育、理科について移行措置として時数を増加した。その確保のため、3年生における週の時間割に位置づける選択教科1をなくし、その分の0.5ずつを2教科にあて、さらに、0.5をプラスしたため、1、2年生より2週で1コマ多いプランとなった(表5)。

表4 本校の実態に即して調整した週コマ数

	1年	2年	3年	合計
国	5.0	3.5	3.5	12.0
社	3.0	4.0	3.0	10.0
数	3.5	3.5	4.0	11.0
理	3.0	3.5	3.5	10.0
音	1.5	1.0	1.5	4.0
美	1.5	1.5	1.0	4.0
保体	3.0	3.0	3.0	9.0
技家	2.0	2.5	1.5	6.0
英	3.5	3.5	4.0	11.0
総カリ	4.0	4.0	4.5	12.5
集中総	(1W, 1W, 1W)			
自主	1.0	1.0	0.5	2.5
選択			1.0	1.0
OWN	(1W, 1.5W, 2W)			
合計	31.0	31.0	31.0	

表5 2001年度の移行調整後の週コマ数

	1年	2年	3年	合計
国	5.0	3.5	3.5	12.0
社	3.0	4.0	3.0	10.0
数	3.5	3.5	4.0	11.0
理	3.0	3.5	4.0	10.5
音	1.5	1.5	1.0	4.0
美	1.5	1.5	1.0	4.0
保体	3.0	3.0	3.5	9.5
技家	2.0	2.0	2.5	6.5
英	3.5	3.5	4.0	11.0
総カリ	4.0	4.0	4.5	12.5
集中総	(1W, 1W, 1W)			
自主	1.0	1.0	0.5	2.5
選択				0.0
OWN	(1W, 1.5W, 2W)			
合計	31.0	31.0	31.5	

(4) 2001年度も、2週間で1サイクルの時間割を作るので、教科と、総合カリキュラムを時間割の形に示したものが、表6である。移行期調整のため3年生に2週あたり1コマ増える教科の時間を土曜の3時間目とし、その裏を1、2年生は、主に、移行期の教科学習内容の補充として利用することとした。

朝の20分総合カリキュラムは、1日の時程が45分になることをふまえて、15分に短縮し、2週で6回、すなわち、45分のコマに直すと2コマ分(2週あたり)と計算した。朝の総カリが入らない曜日(\*)は、学年の裁量で、朝学習や、読書など工夫して試行をすることになった。

表6 S45分L90分・朝15分による時間割

		月	火	水	木	金	土
L	S	朝	総	総	*	総	*
	S	1	教	教	教	教	教
	S	2	教	教	教	教	教
		3	教	教	教	教	**
		4	教	教	教	教	
		5	教	総	教	教	総
		6	教	総	教		総

教：教科 総：総合カリキュラム 自：自主研究

		月	火	水	木	金
朝	総			総	*	総
	1	教	教	教	教	教
	2	教	教	教	教	教
	3	教	教	教	教	教
	4	教	教	教	教	教
	5	教	総	教	教	自
6	教	総	教		自	

自は2週に2コマの割合だが、行事や総カリとの関連で左表の総の時間にも配置される。

\*, \*\* 学年裁量

\*\* 3年は教科

朝 総カリ, \*も15分間

## 2. 2001年度総合学習の提案

### (1) 4年間の開発研究

1978年度より実践してきた「自主研究」や、1995年から積極的に取り組んできた「教科クロス型の総合学習」そして、1982年度から道徳、特活、ゆとりの時間を合わせて設定した時間枠の中で生徒の自主性をのばしていこうと設定した「総合カリキュラム」などの実践研究成果がある。それらを生かしながら小中連携による開発研究に取り組んできた。

開発の中では、中学では学習領域を「教科」「総合（総合Ⅰ）」「探求（総合Ⅱ）」の3領域とした。「総合」はクロスする教科側のねらいに即して追求主題を設定していく「教科クロス型総合学習」と子供たちの関心やその時の社会的な話題を取り上げ、学習をコーディネートする「学年裁量型総合学習」に分け、「探求」は、課題を追求しつつ学び方を学ぶ「自主研究」として展開した。これまでどのようにどれだけの時間をかけて総合学習が行われてきたかについてまとめたものが、表7である。研究推進委員会では、アンケートなども取りながら、3年間を通して目指す生徒像や、育てていきたい力を明らかにしながら、どの学年も共通に進めるべき内容と、学年の裁量が活かされる内容を整理していく作業から始めた。

### (2) 本校における学習内容の構造化（2001年度～）

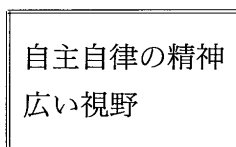
研究推進委員会では、学校目標である「自主自律の精神、広い視野」に基づき、総合カリキュラムをお茶中のプランの作成に取りかかり、まず、総合学習を含めたお茶の水女子大学附属中学校のカリキュラムを次のように提案した。

- ① カリキュラム全体を「教科」「総合カリキュラム」の2領域に整理する。
- ② 「教科」は指導要領の9教科と、開発研究の成果である「OWNプラン」を位置づける。
- ③ 「総合カリキュラム」では、「道徳」「特活（学活等）」「総合学習」で構成する。

上の①～③を、学習領域の構造化として示したものが図1である。

図1. 総合学習の位置づけ

#### 学校目標



#### 領域構成

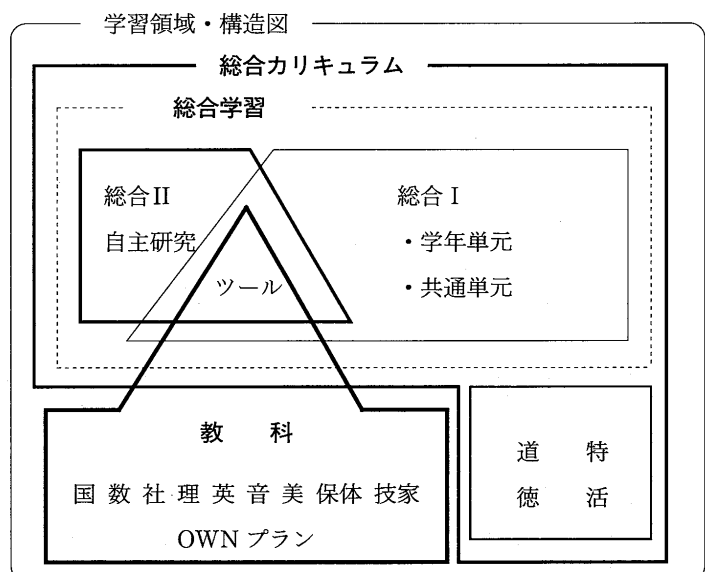
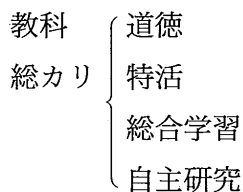


表7 平成9年度～平成12年度 総合学習の実践

教：教科クロス  
 教A (教科横断的) 教B (学年・学校行事と関連) 教C (学年裁量型と関連) 学：学年裁量型

☆総合学習の実施は、志賀や修学旅行をのぞけば後期に集中。前期は学校行事が多いため、2学期半ば以降に設定することが多い。  
 ☆教科クロス型は、【教A】はあらかじめ時期を設定しない年間カリキュラムに組み込み、実施が難しい。【教B】は行事と結びつけて定番化しやすいが内容がふさわしくなかったか、検討が必要。【教C】は、学年裁量型の動きによって、内容が定まるため、教科が参加しやすい時とそうでないときがある。  
 ☆学年裁量型は、学年ごとに実施されている。総カリ内で35時間となるのは難しく、時間が不足がち。三月末に学年発表会を設けることが多く、自主研究のまとめとめともぶつかる。

年	方針	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
4月					
5月					
6月					
7月					
8月					
9月					
10月					
11月					
12月					
1月					
2月					
3月					

学年	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
1年	(秋山)	(石田)	(関根)	(加々美)
2年	(福田)	(秋山)	(石田)	(関根)
3年	(坂下)	(福田)	(秋山)	(石田)

学年	1年	2年	3年
1年	約16h 「中学生」	約10h 「米」	約16h 「大地の鼓動」(志賀)
2年		約10h 「人と人」	約8h 「人と人をつなぐ」
3年			約17h 「心理」
1年			約12h 「人と人をつなぐ」
2年			約17h 「心理」
3年			約30h 「WILDLIFE」中学校生活を振り返るCD制作
1年			約8h 「岩手」
2年			約8h 「自然と共生」(志賀)
3年			約8h 「NOとよめる日本人をめざして」

発表会	発表内容
【教A・B】	約8h 「水」(修学旅行とからめて)
【教A】	約10h 「米」
【教B】	約8h 「大地の鼓動」(志賀)
【教C】	ロールプレイ ロイスセッション
【教A】	約16h 「21世紀に向けて」
【教B】	約8h 「アジアの中の私」 「健康な身体になりたい」
【教C】	約8h own
【教A】	約12h 「人と人をつなぐ」
【教B】	約17h 「心理」
【教C】	×【教A】 「ことば」 未実施
【教B】	約4h 「国際」(横浜遠足)
【教B】	約8h 「東京探訪」 学年発表
【教B】	約10h 「つなぐ」 ホームページ作成
【教B】	約20h 「NOとよめる日本人をめざして」 特別プログラム

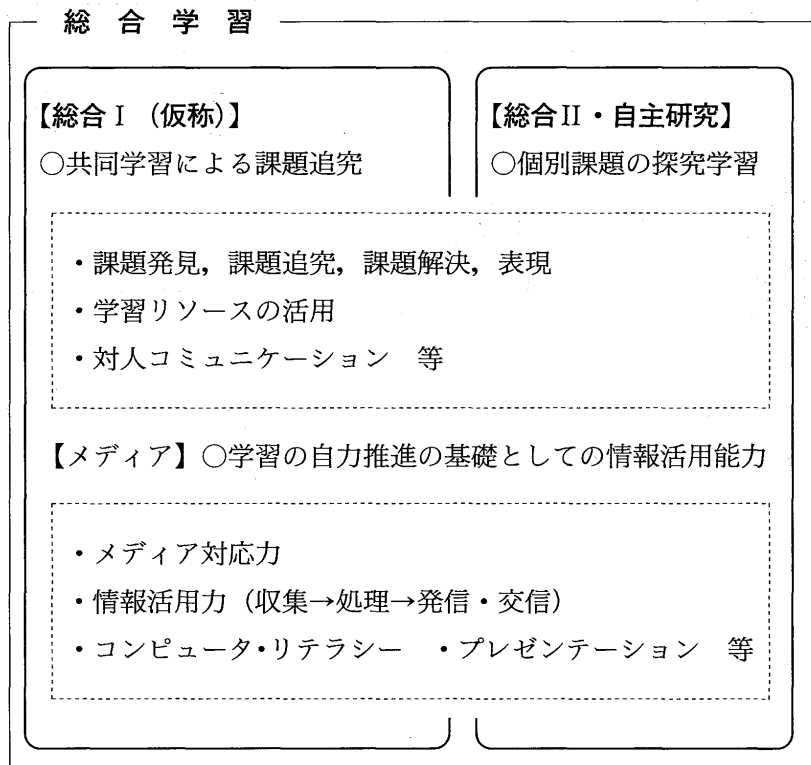
総合学習については、図2に示すように、共同学習による課題追求か、個別課題の追求かという視点から、「総合I（仮称）」、「総合II（仮称）自主研究」の2つの領域に分けて展開することを提案した。

来年度は、実践を進めながら、総合学習でどんな力を付けるのかを、整理していこうと考えている。その際、メディア…学習の自力推進の基礎としての情報活用能力…という視点を新しく打ち出した。これまでも総合学習や、自主研究の中で行われていた、「学び方を学ぶ」ということをふくめ、特に、メディアに対応する力、情報を活用する力、コンピュータ・リテラシー、プレゼンテーションの力等を総合学習の中で、あるいは、教科の中で網羅していけるように考えたのである。また、特にコンピュータ活用技能の部分については、中学1年生の時に総合学習の1単元として計画するよう提案した。

本校の総合学習で付けていく力については、2001年度に実践を進めながら、抽出し、整理していく予定である。

総合学習の内、自主研究については1、2年生は年間35コマ、3年生は年17.5コマをこれまでの実践研究の成果に基づいて継続して行う。

図2 総合学習



総合Iの方は、通常の時間割に位置づけられた総合カリキュラムの中で行われるものと、各学年1週間分ずつ行う集中実施の2つのやり方で行われる。

集中実施の期間には、通常、必修教科が割り当てられている時間を「総合学習」に当てる



ので、1、2年は年間26時間、3年は26.5時間行うことになっている（1回に1週間を行わず、回を分けて実施してもかまわない）。通常の時間割に位置づく総合カリキュラムは、1、2年ではS45分のコマで数えると年間140コマ分、3年生は157.5コマ分になる。このコマ数の中から、道徳、特活などの規定時数を確保すると、総合学習Iにかける時間数は、1、2年は62.4コマ、3年は79.9コマとなる。総合学習Iも45分のSのコマ、90分のLのコマ、15分の朝のコマなどを効率よく利用して、展開することになる。

### (3) 2001年度の具体的な単元構成案

表に示したように、研究推進委員会では各学年とも、年間2単元で構成することを提案し、内容は、各学年がもう少し試行しながら検討することとして、大枠でこのように試行することが決まった。

「学年単元（仮称）」では、◎のねらいをおさえて縦の系列を作り、具体的な学習主題や活動は学年で作っていく。「共通単元（仮称）」では、技能的な面をおさえつつ、作品等の制作を出口として展開する。

表8 単元構成案

	学年単元（仮称）	共通単元（仮称）
1年	◎自分と友達 例「自己・友・家族」 「生命・身体・性」 「東京」 ※校外学習と	コンピュータ活用基礎 調べ学習や学習のまとめなどのためのコンピュータスキルを学ぶ。 ※「メディア」の一部分
2年	◎社会や世界への発信 例「環境」 「福祉・ボランティア」 「人権・平和」	フィールドワーク 宿泊行事と関連（志賀・自然系） 自然からのメッセージ 等
3年	◎社会に生きる自分 例「社会体験」 「文化・伝統」 「アジアと日本」	協働的創作 卒業記念制作（ビデオ・CD他） ・交渉，既習事項の活用，表現活動 自力推進（協働的活動）

また、同時に、実践を進める際の留意点として、次のような内容も示した。

- ◎学年単元（仮称）※実践資料や協力先のリストなどを整理し共有化できるようにストック。
- 各学年ごとの学習のねらい（「自己発見・他者理解」等）を共通に設定
- 「テーマ例」を列挙して参考とし、学年目標や子どもの実体等をみながら、学年ごとにテーマを設定する。（帰国研究との関連も配慮できるとよい。）
- 教科知を子どもたちが総合的に活用するしかけの工夫、総合の「実の場」から教科知の学習成果を高める工夫。（教科と総合の相互関連をはかる）

◎共通单元 (仮称)

- どの学年も共通に実施。行事などとの関連をとって総合单元化を図る。
- 「自然からのメッセージ」等の創作的な活動に結んで、達成感、効力感を高めつつ進める。
- 行事とうまく関連づけて、無理のない効果的な展開ができるよう工夫する。

◎メディア (情報活用スキル)

- コンピュータ活用技能は1年で单元化して、以後の学習の基礎とする。
- 教科・総合I・IIなどと結んで情報活用能力を高めていくようにカリキュラム化を進める。

◎自主研究

- 子どもがその時点でもてる能力技能をフル活用して学ぶ、総合学習の一つの極として位置づける。
- スキルを身につけつつ学ぶ、スキルを活かして学ぶ総合的な「学習展開」の場。
- 子どもたちの学習への第三者の支援・評価 (専門家等) の導入が可能か。

### 3. 2001年度のOWNプランの計画

OWNプランの中で、普通の授業と比較して生徒が積極的に学んだ(自分から進んで、やりたい内容を選択して)という評価が確認された。また、教師側の設定する課題にも工夫がされ、特に学習中にどのような支援をするとよいのかについても少しずつ共通の観点が見いだされてきた。また、生徒の自己評価の重要性が認められ、各教科における評価の工夫や、学習全体を振り返りながら進める毎日の自己評価などを試行することができた。詳細は本紀要P105～「OWNプランの研究」参照。

4年間の成果をふまえ、2001年度もOWNプランを継続することが決定した。

期間については、OWNプランを行う際の教師の準備時間の確保や、期間中の授業時間増加への対応、また、生徒の意欲の継続などが話題にあがり、特に3年生の年間4週間について短縮案も提案された。3年生について2000年度通りの実施を支持する考えとしては、卒業前の3学期は既習事項を応用して自立学習を進められる、個に応じた、あるいは、必要感を持って選択できる、また、学年が進むにつれて自立して学ぶ姿勢が高まるので選択の期間や幅を拡大した方がよい、という意見があげられた。教科会での検討や、アンケートを分析し、2001年度は、これまで通り、3年生4週間、2年生3週間、1年生2週間で行うことになった。2002年度以降については、2000年度の研究成果と2001年度の実践を通して検討する必要がある。

時期については、2001年度の年間計画の中で考え、実践を重ねてよりよいプランにしていくことを合意した。

### Ⅲ おわりに

この1年の研究推進委員会の活動成果と課題は簡単にⅠ章にまとめたとおりである。

教育課程の研究については、Ⅱ章で述べてきたように、2002年度を見通して2001年度の新しいS45分コマを基本とした時程の提案ができた。総合学習について、本校独自のプランをつくり、カリキュラム全体の中で構造化し、具体的なカリキュラムや内容の検討に入った。また、新しく、メディアという視点を取り込んだ。これらについては、2000年度には完成しなかった。しかし、目標やある程度の内容を共通にし、学年任せでなく、本校独自の共通なプランとして2001年度に実践しながら研究を進める基盤ができた。

(文責 宮本乙女)